

大分大医大生の

地域医療実習

下

あなたは一定期間、地域（へき地）医療機関に勤務することは、若い医師にとって有意義だと思いますか？（計89人）

【実習前】	60点未満	60～69点	70～79点	80～89点	90点以上
	17人	14人	26人	16人	16人
【実習後】	8人	7人	23人	15人	36人

※全く意味がない(0点)～極めて有意義(100点)

あなたは将来、地域（へき地）で医療を行ってみたいと思いますか？（時期や期間は問わない）（計89人）

【実習前】	60点未満	60～69点	70～79点	80～89点	90点以上
	23人	13人	25人	11人	17人
【実習後】	9人	14人	17人	23人	26人

※絶対勤務したくない(0点)～ぜひ勤務したい(100点)

2004年度に新医師臨

床研修制度が導入されて以降、研修医は、都市部の病院を研修先に希望する傾向にあり、地域の医師不足の要因ともなっている。研修医となる医学生がこの病院で研修を受けるかを決める昨年度の「医師臨床研修マッチング」で、県内の病院を選んだのは108人の募集定員に対して65人だった（12病院計）。

このような状況を考慮して大分大学医学部地域医療学センター（センター長 野口隆之医学部長）は、学生のうち地域での医療活動を知り、地域に目を向けてもらおうと「地域医療実習」を今年から導入した。

現場を知って意識に変化

野口隆之医学部長は、学生のうち地域での医療活動を知り、地域に目を向けてもらおうと「地域医療実習」を今年から導入した。

同センター外科分野の白石憲男教授は「これまでは

大学病院と県立病院での実習だったので、学生は地域でどのような医療がなされているのかわらなかつた。

今回、地域の医療現場を知ったことで学生の意識は大きく変わった」と話す。同センターは今回の実習

訪問看護で患者の自宅を訪れ、診察をする大分大医学科6年生の鳴海雄気さん（豊後大野市、大分大学医学部提供）



他にも、医療機器が充実していることや、地域の医療機関が集まって症例検討会を開くなど知識や技術を伸ばす機会もあることを知り、地域の病院に対するイメージがプラスに変わった学生は多い。

佐伯市の健康保険南海病院で研修した森和樹さん（23）は「大分市出身は往診の際に、少し会話をするだけで喜んでくれる患者さんの姿を見て、これが本来の医療ではないかと思った。地域医療は将来の選択肢の一つ」と話す。

豊後大野市民病院で研修した鳴海雄気さん（24）は「別府市出身はこれまで地域医療は誰かがやってくれていると思ってた。患者さんから『この地域を頼むね』と言われ、必要とされていることをより実感できるようになった。将来は県内で地域医療に携わりたい」と決意を語る。

へき地勤務、希望増える

に当たって、地域医療に対する学生の意識をアンケートした（回答は100点評価で点数化）。

「一定期間、地域（へき地）の医療機関で勤務することには若い医師にとって有意義だと思いますか？」との質問に対しては、実習前は「有意義」に80点以上を付けた学生は32人だった。

同センター内科分野の宮崎英士教授は「病院をはじめ地域の皆さんのおかげで、来年度につながるいい実習ができた。地域の先生たちと学生のつながりもできた。地域の医療機関に対する偏見が解消されたのも成果の一つ」と話す。

「将来、地域（へき地）で医療を行ってみたいと思いませんか？（時期や期間は問わない）」との質問に対しては、実習前は「勤務したい」に80点以上を付けた学生は26人だったが、実習後は49人に増えた。逆に60点未満の点数を付けた学生は16人から36人に増えた。

同センターは今回の実習

「一方『実習を通して地

域医療を目指す学生が増えるのが理想だが、それほど甘くはないだろう。今回は一つのステップ。4、5年後、何人くらい県内の地域の病院で働いているかがポイントになる」と見ている。

今回の実習で学生に地域医療の重要性について講義した豊後大野市の橋本祐輔市長は「実習した学生たちが将来、大分県の地域医療に携わってくればありがたい。地域に一生身を投じてほしいと言わない。人生設計の中で一期間、身を置いてくれるだけいい」と実習が実を結ぶことを願っている。